

# 故郷論再考

千田 智子

## 1. 60年代の郊外—〈ささやかな家郷〉

1960年代の高度経済成長期、東北・北海道・四国・九州の地方から東京へと大量の人口が流入した。そうした New Comer が結婚を機に小さな建売住宅や団地集合住宅というマイホームを求めた。それは、都心から半径30～50kmに及ぶプロールの郊外化と連動し、「郊外・マイホーム・核家族」という、中流の都市家族の典型を生み出した。

一方、そうした働き手を都市に送り出した側一家郷は、都市化・産業化の進行のなか、経済的にも社会的にもアイデンティティを切り崩されていく状況にあった。この「家郷喪失」の事態にたちあって、見田（1971）は「『家郷』は今や、（中略）自らここに建設すべき課題として現れはじめる」と言い、そこから考えられる有力な可能性として「アノミーのシニカルな肯定を背景とする個別としての〈ささやかな家郷〉の創設」を挙げている。いうまでもなくこれはささきの、郊外にささやかながらもマイホームを求めた都市家族の姿と符合する。

当時の都市家族のネットワークに関する研究に、増田（1960）がある。ここで、「主婦の Neighboring」の低調が指摘されている。落合（1993）は、それを「近隣ネットワークに対し孤立主義的なファミリーズムとはまさに成立しつつあった近代家族のプライベティズムであった」としている。だが、このように近隣ネットワークに対して閉じた姿勢を見せる一方で、当時の都市家族は、家制度的でない親族ネットワークに比重の重きを置いていたのである。そうした状況を増田は的確に捉えている。「故郷を遠く離れ、都市地域の住宅に移り住んでも、人々はなお血縁への郷愁を拭いきれない。人々は新しい土地で、新しい地域社会生活を開拓しようと努力しないで、失われていく血縁への依頼心を深めている。故郷と精神的・物理的に断絶したアメリカ郊外生活者と異なっているのは、まさにこの点においてではな

かろうか。」

ところでファミリーズムとは、落合（1993）が増田を引用しつつ説明するところによると、家族中心主義ではあるが、家制度とは異質で、「単に前近代的な共同体社会に対する反抗的な姿勢に過ぎず、それが単に異常な求心性となってあらわれているに過ぎない」という。だが、ここで注意すべきは、真つ向から「前近代的な共同体社会」の秩序と立ち向かおうとするなら、出郷者の心性は、共同体的なものを切り崩す方向に向かうはずであり、それがたちまち「異常な求心性」を示すこと自体、一種の「甘さ」があったのである。

見田（1978）は、当時の出郷者の心性を次のように説明している。「年々都会に流れこんでくる日本の若い男女の労働者たちは、その大部分が、ふるさとを追われて来たのでもなく、ふるさとを見ずてきたのでもなく、ふるさとの駅を送られて来たのであった。彼らはけっして、100パーセントの家郷喪失者ではなかった。そこに彼らの孤独やかなしみの、二重の意味での甘さがあった。」

60年代の都市家族は、「マイホーム主義」という言葉に括られ、プライベートイゼーションが観察されたのだから、それは通常言われるような「孤立化」ではなく、その一見したところの孤立主義的性格は、親族ネットワークによって保証されていた。これは、出郷者が実質的に、家郷とへその緒を繋いだままであったことを示し、また、マイホームへの「異常な求心性」による孤立主義的性格も、心理的に家郷と繋がれていたことを、逆に裏付けるものである。制度や秩序への「反抗」は相源的にそれらを変革するものではなく、愛着の裏返しであり、往々にして制度を強化するものなのだから。

この二面性から成る〈ささやかな家郷〉である郊外の団地の一室は、まさに移植された家郷だったのである。

だとすると、このような〈ささやかな家郷〉の

集合体としての郊外住宅地は、どのような社会が築かれ、どのような空間が現れたのだろうか。

ここに示唆的な見解を与えているのが、吉見(1987)であるが、その議論を要約すると、以下のようなになる。つまり、60年代の出郷者たちは、「とりあえずここではないどこか」を求めて出郷するが、都市の空気にもなじめず、都市からも脱出しようとする。そこで、都市のなかに二時的な共同性の場を形成するわけだが、これが寺山修二的な「新宿」における交感性の醸成であった。そうした二時的な共同性が、「都市における諸々の出来事が先送りされる〈未来〉の側からの意味の補給によって再編成されていく」のが、第二の局面であり、ここにおいて盛り場として70年代に「渋谷」が台頭する。けれども、この60年代から70年代にかけての転回は、「〈単一の未来〉の消失」という、もう一つの重要なエポックと交差していることに注意すべきだろう。

それに関連して、吉見の議論で重要と思われるもう一点は、以下のような指摘である。わが国の都市化は、時間性の彼方の〈外国=未来〉を支点に人々のまなざしを組織していくことを通じて成し遂げられた。その際、都市は「未来」の側に、家郷は「過去」の側に位置づけられ、東京/地方という空間的な関係が未来/過去という時間的な関係に同値されていった。だが、高度経済成長のなかでの家郷の変貌は、「過去」の像としての家郷を解体し、こうした空間軸と時間軸の対応を不可能にする。結果、空間軸との対応の消失は、時間軸の方向喪失をもたらした。そこで、60年代半ばまで、日本の民衆にとってひとつの普遍性として現前していた、単一の〈未来〉が解体したというのだ。

さて、家郷への「甘さ」を引きずったまま都市に流れ着いた人々は、とうぜん寺山修二的な「新宿」における交感性にシンパシーを感じる。ところが、そうした交感性は、それを集約し都市から与えられる〈未来〉-「渋谷」に回収されていく。都市という大きな身体の流れからすれば、それはその通りなのだが、出郷者ひとりひとりの生活史によって生まれた肌感覚に視点を捉えてみると、彼らのドラマの起点と終点として設定されていた、家郷=過去/東京=未来という空間・時間の関係

性が消失した後に現れ出た「渋谷的なるもの」にシンパシーを感じずらうか。これは全く無理な話である。つまり、彼らにとってみれば、新宿で出郷者がたむろしムラの持ち寄りによって育まれた、寺山修二的な交感性までは、肌感覚として「わかる」が、未来もなく過去もない、そこに立ち現れた「渋谷的なるもの」は、まさに「わからない」のである。

出郷者にしてみれば、都市は、自分の肌感覚からどんどん遠ざかっていった。そこに、自分自身をもてあましたまま「転向」が行われ、彼らは所帯を持つ。「渋谷」を台頭させた第二局面が、同時に郊外への人口流失を意味するのはこのためである。この時期、都心に滞留していた人口が、郊外へと拡大していったのは、決して経済的要因ばかりからは考えられない。彼らは自分らの肌感覚でつかめなところへ都市が編成されつつあることに気づいたからこそ、都市にありつつ都市でない周縁へと拡散していったのである。

その拡散の先が、郊外居住地域であった。ここは、都市の編成の方向性とは無縁地帯である。彼らは、そこではいまだ家郷=過去/東京=未来という空間・時間の単線のベクトルのなかに生きることを許される。未来のもと編成されようとしている東京からはじき出された彼らがもめたのは、当然のことながら、家郷=過去であり、それが先に触れたようなくささやかな家郷の姿である。

先に述べたようにくささやかな家郷には、孤立主義的性格は見られたものの、そうした傾向もまた、家郷との連続の裏返しであり、各々のくささやかな家郷が共有できるものであった。その意味では、均質的都市家族の群れが、共有できる心性のもと、同一の秩序のなかに生きていたのである。ムラの秩序からはじき出されることもなく、都市に出てきた出郷者たちは、結局秩序の世界に帰っていったのである。彼らは未来を求めて出郷したが、まもなく都市における未来の有り様は、彼らにとって了解不可能なものに変質した。未来が消失した時点で、彼らのベクトルは家郷=過去に転回したが、彼らは実際に家郷に帰るわけにはいかなかった。そこで、疑似的に都市から撤退し、そこに過去を再現しようとしたのである。

同じ2 DKの造りの数千戸の団地が整然と配置

される郊外住宅地、このコンクリートでのっぺりとした空間は、ムラの秩序の再現に他ならない。そこは都市にあって都市ではないのだ。

## 2. 80~90年代の郊外—「都市的」秩序空間

落合（1993）にしたがうと、60年代の都市家族と80年代のそれを比較するとき、まず前章で60年代の都市家族に指摘された親族ネットワークが弱体化していることが挙げられる。親族ネットワークは、人口学的理由からも、親に極限されざるを得ないという。その代わり、特に子供が小さい時期ほど、近隣ネットワークを発達させている。それは、乳幼児を抱えていても親族の援助を受けられない家庭が少なくないことから、必要に迫られて近隣ネットワークに頼る状況が広がっているからである。

前章の議論に引きつけると、60年代の都市家族—〈ささやかな家郷〉は、明らかに変質を遂げている。まず、親族ネットワークの弱体化により、家郷との実質的な連続性は、消滅せざるを得ない。また、共有できる過去の物語としての家郷を語る前提となる、単一の時間・空間のベクトルは消失している。すると、そうした共有可能な物語としてある家郷との連続性・求心制を、存在の起源としていた郊外住宅地の均質空間の様相が変質している可能性は十分にある。

60年代に成立したであろう近代的核家族、ここへの意味の求心は、親族ネットワークの弱体等から、量的に増えこそすれ、減ってはいないと考えられる。が、その質的变化は大きなものがあるだろう。一言で言えばそれは、吉見が指摘するごとく、〈ささやかな家郷〉には（ささやかといえども）が含意されていたような、共同体的なものへの希求すら切り崩す方向に向かっているのではないか。

だが、これは先に述べたような80年代都市家族にみられる、近隣ネットワークの強化の動きとは逆行するようにみえる。近隣ネットワークの強化という側面だけ見ていれば、かえって共同体的なものへの希求は増しているとみられるのである。この一見相反する要求によって、織りなされる都市近郊のコミュニティをどう考えていったらよい

のか。そこに、赤坂（1991）の、障害者施設の建設を頑強に拒んだニュータウンにみられるコミュニティのあり方についての指摘が、重要な示唆を与えているように思う。

現代の都市家族が居住の場を求め、拡大し、発達し続ける都市近郊の住宅地域は「あらゆる意味で、多様性つまり混沌を排除した均質的空間である」。そこでは、都市民と呼ばれる人達が住まうにもかかわらず、「混沌をいれる器という都市の本質にかかわるもうひとつの性格をまったく欠落させている」。

ここで赤坂のいう、都市のもうひとつの性格とは、都市は元々、不特定多数の異質な人々、漂泊性の色濃い人々が行き交う、異質なものを包摂する開かれた場であったという、「異物吸収型」の側面である。栗本（1983）の議論に引きつけるなら、ムラとは秩序と文化の世界であって、都市は、その秩序の世界から押し出され、落ちこぼれた人間が流れ着く場所なのだ。ところが、ニュータウンに代表されるような、現代的な住宅地空間は、ことごとく「均質的」であり、「異物嘔吐型」であるというのだ。そこは、都市であって都市ではない。

そこで、昨年行った、通勤族の妻に対する調査結果に立ち返って、このことを考えてみたい（千田、1995）。

彼女たちはまず、社宅内ネットワークにおいて「均質化」する。彼女達同士が同世代であり、したがって子供の年齢も似たものであるから、生活時間のパターンは自ずと似通ってくる。それは、公園で、幼稚園の送り迎いで、習い事で、日々お互いにチェックされ、横並びが加速していく。こう見るかぎり、社宅は、都市の中にあって、完全に匿名性を剥奪されたムラの社会である。

では、社宅外に目を転ずることにしよう。子供を媒介にしたネットワークで、そうした社宅内の関係を抜け出すのだが、そこにいるのはやはり、同世代の、大抵は同じような境遇の通勤族の妻である。子供のこと、夫のこと、社宅内のいざこざ、同じような悩みを分かち合い、「どこも同じねー」とうなずきあう。だが実は先に指摘したような「必要に迫られた」近隣ネットワークは、社宅内で完結可能であり、「社宅に入ればどの土地に行っても、あまり関係ない」のである。よって、

地域社会と接点をもったとしても、そこで織り成される人間関係は、付随的なものといえるだろう。そこは、実際の機能面からすれば付随的であるだけに、彼女たちの人間関係の志向が、色濃く反映される。そこでは、社宅内で侵害されつづける匿名性のある程度確保でき、「知られたくない部分については知られずに済む」のである。ここで彼女たちにとって重要なのは「話が合う」ことであり、この共振性をもとめて、彼女たちは社宅以外のネットワークを欲するのである。それは、社宅内のムラのネットワークに比べれば、かなり「都市的」なふるまいである。

だが、こうしたふるまいが、カッコ付きの「都市的」であることは、さきの赤坂・栗本の議論に照らせば明らかである。彼女たちが欲しているのは、カッコ付きの匿名性であり、不特定の未知なるものに対して開かれた態度では全くない。合言葉は「どっこも同じねー」なのだから。均質の都市家族が、カッコ付きの匿名性を持ち寄り、それによって秩序付けられるコミュニティーこれが、都市近郊の住宅地域である。

「都市的」な接触、これ自体が相互に了解されたお約束となり、秩序づけられる社会。これは、見かけは共同体的ではあるが、その実、共同体的なものを突き崩していくものである。「都市的」な接触とは、宮台(1994)の指摘するところの共振的コミュニケーションに類似するものである(私は宮台の提示するほどには、このコミュニケーションのあり方を皮相的なものとは考えないが、これをコミュニケーション回路の限定もしくは分断を前提に「ノリを同じくする」縦割りのコミュニケーションとしている点は、同質と考える)。

コミュニケーション回路の分断を前提とした、この「都市的」な接触の蔓延は、共同体的なものへの希求をまさに破壊していくのである。が一方で、こうした接触の有り様は、相互に了解されており、その意味では、共有の秩序のもと、コミュニティの体裁は保たれる。

〈ささやかな家郷〉の集まりとしての60年代の都市近郊住宅地と、80年代の都市近郊住宅地のありようの決定的な差は、ひとつにはコミュニケーションの様態が共同体への希求を切り崩す方向に

向かっていること、もう一つには、単一の未来・過去の軸の消失により、コミュニティの起源としての、家郷への求心(遠心にみえてその逆)が消失していることである。だが、一見したところのたたずまいは、一貫して、「カッコ付き匿名性を保証する」という秩序のもとに整備された、のっぺりした空間のままである。

### 3. New Comersの「ふるさと」物語

かつてのNew Comersは、こうした郊外空間の変質を知ってか知らずか、郊外住宅地をコミュニティとして編成しようとするとき、「ふるさと」という表象を好んで使う。

いま定年期にさしかかっている彼らの意識は、家族やコミュニティの方に回帰しつつある(奥田, 1993)。彼らは多かれ少なかれ、単一の未来が解体する前の物語をいまだ生きているのであり、したがって、単一の過去の物語—ふるさとへの求心を信じている。そこで、コミュニティを論じることは、彼らにとって極めて自然なことである。

一方で彼らは、若い世代は観念としてしかふるさとも自然も知らないのだと非難する。こんな灰色のコンクリートの団地住宅で生まれ育った世代には、ふるさとも自然も感じられるはずがないと。けれども、そうしたあくまで整然とした、のっぺりとした、秩序だった空間を創りだしたのは他ならぬ彼ら自身の家郷への求心であり、家郷の秩序から異物として排出されたわけではない、彼らの過去—ふるさとへの「甘さ」が、そうした秩序の空間を現出せしめたのである。ところが彼らは、自分らの心象風景が村の山や川であり、それをふるさとと思っているように、家郷をもたない生え抜きの「都市民」である次世代の心象風景は、そうしたコンクリート空間であり、それが都会人にとってのふるさとなのだという言説を、暗に期待している。もっというなら、それは「表層的」故郷感であって、「本質的」な故郷感は、やはり自分らの描く故郷のイメージなのだ、と言いたげである。それは倉石(1989)の「都市人がいかにふるさとを求めているか」ということは、『ふるさと』ということばの氾濫によっても明らかであろう。ただそのふるさとはその浅いものになっているのである。」というような言説に端的に示さ

れている。

けれども灰色のコンクリートの秩序空間は、彼らが共通の過去（故郷）から共通の未来（外国）というベクトルが解体していくなかで、家郷を出立かる第一局面においてすでに孕んでいた、秩序空間に対する「甘さ」が、くささやかな家郷を郊外に築き上げる段階において、ふいに現れ出たのである。その意味では、コンクリートの秩序空間を、心象風景として幻視していたのは、生え抜きの「都市民」ではなくして、家郷を後にした経験を持つ、かつてのNew Comersの方なのである。

生え抜きの「都市民」が、実体としての自然や故郷を知らないから、観念することしかできないのだ、というのは全く見当違いである。人が観念を通してしか事象と接触できないのは、普遍的なことである。むしろ、実体としての自然や故郷を体感したのだと、リアリティの限界線を相互に了解可能に設定できることのほうが、特殊な事態だ。

彼らは「都市民」のふるさと観の底の浅さを否定することで、New Comersであったころの自分が故郷を離れた過去を否定している。まさに帰去来情緒のなかを生きているのである。こうしたマイナスの感情は、自分が故郷を後にし、それによって故郷が切り崩されていく時代性を背負ったことのない世代には、共有できないものであり、何より先に触れた共有の未来と過去という、時間的・空間的なベクトルが相互に了解されない限り、普遍性をもちえない物語である。

#### 4. 故郷（コキョウ）それ自体へ

民俗学の分野から語られる故郷（ふるさと）は、自分の経験から帰去来情緒の物語のなかで、準拠集団としての故郷を語るものと、実際に都市化によって過疎に追い込まれた土地を観察することにより、かつての農村の消滅を語るもの、と二つの流れに分けられるが、その帰結の多くは、故郷（ふるさと）は、多分にユートピア的なものであり、幻想である、というものだ。だが、そうした了解があるにもかかわらず、その幻想の中身は、いま一つ語られてこなかったように思う。そこで議論は、ふるさとにはじまり、ふるさとに終わる。つまり、民俗学は日本文化の共通理解の前提となった空間・時間の喪失を語るが、彼らの依っ

ているのは、相変わらず共通理解の前提となった空間・時間の物語である。これではトートロジーにしかならないのは明らかだ。もし、普遍的に故郷（ふるさと）を語ろうとするなら、まず共有可能な物語性を排除したうえで、故郷（コキョウ）に立ち戻るべきではないのか。

以下、故郷（ふるさと）とは、時間的・空間的に拡大された故郷（コキョウ）なのだという認識のもとに、故郷（コキョウ）とは何であるかを考えてみたい。

そもそも人が根源的に関係を取り結べるのは、空間にせよ、時間にせよ、ごく限られたスケールにおいてでしかない。トウアン（1992）は、「ちょうど、「人間愛」を見せかけることがわれわれの疑惑を招くように、トポフィリアは、大きな領土に対して主張されると、偽物のように聞こえる。人間の生物学的な要求や、感覚に結びついた能力に見合うくらいに縮小された、こじんまりした大きさがどうも必要なのだ」という。柄谷や蓮見は、時間について同様の指摘をしている。時間と空間は運動しており、個々人のコスモスの核となるのは、瞬間的な時空との出会いなのである。もし、民俗学がその価値の一つを宇宙論的視座に見いだすなら、この意味から故郷（コキョウ）は問われなければならない、故郷（ふるさと）はその果てに問われるもののはずである。

「ふるさと」の物語を一旦解体し、通時的な「人間の生物学的な要求や、感覚に結びついた能力に見合うくらいに縮小された、こじんまりした大きさ」の「故郷」を考えなくてはならない。それは、とりもなおさず、ある意味で故郷を観念的に、抽象的に捉えなおすことであるから、バーガーの言うような「人間の生きるうえで最低限必要な、意味で満たされた秩序だった領域」としてのコスモスを想起するかもしれない。こうした捉え方では、空間の要素は極小化、或いは抹消されているが、結局は、安定し一貫した自我という近代の物語に支えられており、時間的に延期されたコスモスと言わざるを得ない。

つまり、コキョウとは、個々人のコスモスの核となる、瞬間的な時空との出会いなのだと定義できよう。それが、空間的に拡大されることによって、一般にいうような故郷の村（ふるさと）、ク

ニ、国家などにリアリティを与えることが可能になる。また、時間的に拡大されることによって、物語が発生する。ただし、時間と空間は連動しているのであり、拡大の作用についてもそれは同様である。こうして、コキョウを時間・空間双方において拡大していくと、「ふるさと」の物語、「愛国心」の物語と、諸々の物語が派生していくのだが、これについてはベルクが指摘しているように、そうして個別的なものを編成していくにつれ、相互に了解可能な物語に地ならしされていく。こうした過程で、コキョウに出会った最初の根源的な感覚から剥離してゆき、そこに欺瞞の余地が生ずるのは言うまでもない。

そうしたコキョウの感覚を考えるにあたって、民俗的世界観という見地から興味深い考察をおこなっているものに坪井(1980)がある。坪井は、「筆者自身が説明上で未熟な面を認めているのであるが」としながらも、日本人の民俗的世界観概念図を描き、そこで、現世の都市的世界は他界である故郷他界と連続しており、都市的世界は他界的象徴であるイチガミをかかえこみ、故郷他界は現世的空間であるフルサト、ボチを抱え込んでいる。大きくは現世と他界に分類され、さらにその2つを結ぶ境界が存在する。そしてこの3つの世界は立体的に存在交錯し、互に行き交いダイナミズムを構成している。

こうしたダイナミズムは時間や空間の拡大を許さないものではなくである。とくに、近代的時空の観念のなかに生きる我々にとって、こうしたダイナミズムとの出会いは、時間と空間の隙間に突発的に現れ出る裂け目のようなものである。その時間性にせよ空間性にせよ少しでも拡大され延期されれば、近代の織りなす物語にもっともらしく回収されてしまうことに注意すべきである。

コキョウとは、時間的・空間的に突如として現れ出る他界であり、そこは元来、個々人のコスモスの核となる、時空のねじれと出会う契機なのだ。だからこそ、その地平に果てには、存在の始源としての日本人共通のふるさとが現れ出る可能性もある。

## 5. コキョウの現れ出る裂け目

以上のように考えていくと、自分自身の生活史

の中に、厳然たる「リアリティ」の物語を抱え込んである、かつてのNew Comersよりは、単一の〈未来〉解体後の生え抜きの「都市民」の方が、コキョウに出会い、それを自分の世界のなかで有意義化するにあたっては、戦略的に有利な立場にあるように思える。彼らは、自分自身の生活史の中に、厳然たる「リアリティ」を持つ契機を欠いたまま育った。均質ののっぺりした空間を、その始源の物語を消失した虚構の空間として、何らのドラマ性を与えることなく生きていかなければならないのだから。逆に言うと、彼らが世界を有意義化し、自分自身を有意義化する契機は、そうした時間的・空間的に突如として現れるコキョウとの出会いしかないのだ。

ところで、かつてのNew Comersが創りだした均質の風景のなかで、新たな都市的感性が育まれたことはまず間違いない。吉見が指摘しているように、70年代以降急速に台頭し、90年代に至るまで常に発信地であり続けた〈渋谷的なもの〉の担い手は、このような郊外に居住する家庭の子弟たちだったのである。吉見は、〈単一の未来〉が解体した後も、何らかの形で未来を求める我々の心性自体に変化はないとし、〈未来〉は、諸々の戦略的契機によって、その都度、個別的に仮構されていく方向へ向かったという。そこで、我々の生活世界は、「眺める」という契機を希薄にしたまま、「演じる」という契機を突出させていくのだと。

だが私は、都市の戦略的契機によって仮構される〈未来〉を、若者が従属的に「演じる」というよりは、彼らが、時間的・空間的に突如として出会うコキョウが、都市のなかで再編されていく姿が、「その都度、個別的に仮構」される〈未来〉となって可視的になっていると考えたい。

コキョウとは、自分の存在の始源となる地平を、時空をこえてかいま見る機会であり、その意味では、その人が都市にしようが農村にしようが、コキョウが現れ出る裂け目は、平等にある。ただ、その出会いを、自分の世界の中で有意義化できるかどうかは、秩序を秩序として生きる、あるいは物語を物語として生きる、そうした態度をどれだけ無意味化できるかにかかっている。そう考えると、栗本の言うようなムラビトとして生きている限り、コキョウを有意義化することはできないと

考える。コキョウは、都市民として生きて初めて、意味を与えることができるのだ。すると可能性としては、都市の方がコキョウにより近い位相にあるといえよう。異郷にあって故郷を意識するのは、つまらない差異の戯れだけからではない。異郷にあって都市民として生きてみて、ふるさとの村で生きているときも出会っていたコキョウを、やっとなり意味化できる人が多いということだ。

一生、根をもつことを考えつづけたシモーヌ・ヴェイユの生涯を綴った『シモーヌ・ヴェイユの死と信仰』のなかで、宇田達夫はヴェイユの都市観について次のように書いている。「都市への愛こそ、人間の抱くべき、真に崇高な愛である。…その都市とは、今日大都市などと言われる類のものとは根本的に違う。ヴェイユにいわせれば、『それは人々の呼吸する空気と同様意識されない人間の環境』であり、『自然、過去、伝統が夫々相互に接触しあう接触領域』であり、『メタクシュ]すなわち仲立ち、壁、橋などとも共通の理解を含む特殊な領域のことである。」(栗本、1981より再引用)

存立の始源の物語を消失し、虚構空間としてたたずむ灰色の秩序空間、ここに裂け目として現れ出るコキョウを、「都市民」が自らの世界のなかでどの様に有意義化していくのか、また、それをマスとしての都市の身体がどう吸収し編成していくのか。これらは今後の課題としたい。

- 赤坂憲雄(1991)：『排除の現象学』筑摩書房、247頁。  
奥田道大(1993)：21世紀システムとしての大都市とコミュニティ。『21世紀日本のネオ・コミュニティ』、東京大学出版会、229-245頁。  
落合恵美子(1994)：『21世紀家族へ』有斐閣、244頁。  
落合恵美子(1993)：家族の社会ネットワークと人口的世代、『21世紀日本のネオ・コミュニティ』、東京大学出版会、101-130頁。  
栗本慎一郎(1983)：『都市は、発狂する。』光文社、234頁。  
栗本慎一郎(1981)：『光の都市 闇の都市』青土社、255

- 頁。  
宮成真司(1994)：『制服少女たちの選択』講談社、286頁。  
イーファー・トゥアン(1992)：『トポフィリアー人間と環境』せりか書房、446頁。  
オギュスタン・ベルク(1988)：『風土の日本』筑摩書房、  
片桐雅隆(1991)：『変容する日常世界—私化現象の社会学』世界思想社、219頁。  
倉石忠彦(1989)：「ふるさと」の変貌。国立歴史民俗博物館研究報告、24、147-167頁。  
小山修三(1993)：膨張する故郷。石毛直道編『現代日本文化における伝統と変容9 昭和の世相史』ドメス出版、79-98頁。  
千田智子(1995)：転勤族の妻たちの故郷観。お茶の水地理、36、66-72頁。  
高橋勇悦(1981)：『家郷喪失の時代』有斐閣、227頁。  
坪井洋文(1980)：民俗研究の現状と課題。国立歴史民俗博物館研究報告、1、239-329頁。  
坪井洋文(1986)：故郷の精神誌。  
谷川健一他編『日本民俗文化体系12 現代と民俗』小学館、267-308頁。  
坪井洋文(1986)：故郷と都市民。『民俗再考—多元的世界への視点—』日本エディタースクール出版部、214-226頁。  
松永伍一(1975)：『ふるさと考』講談社(現代新書)、201頁。  
見田宗介(1965)：新しい望郷の歌—現代日本の精神状況—。『現代日本の心情と論理』筑摩書房、5-16頁。  
見田宗介(1978)：『近代日本の心情の歴史—流行歌の社会心理史』講談社(学術文庫)、258頁。  
宮田 登(1988)：流行歌の中の「故郷」観。春秋生活学、3、130-137頁。  
吉見俊哉(1987)：『都市のドラマツルギー—東京・盛り場の社会史—』弘文堂、355頁。  
P.L. バーガー、B.ケルナー、H.ケルナー：『故郷喪失者たち—近代化と日常意識』新曜社、283頁。